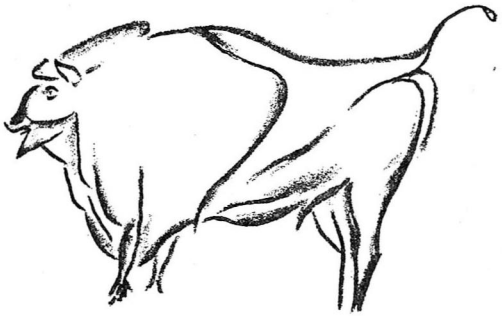
牛年にあたって



編集兼発行人
常務取締役　**中　野　富　雄**

『牧草と園芸』の読者各位におかれては，ますますご健勝にて，新春を迎えられたことと心からお喜び申し上げます。

目まぐるしく変転した『ねずみ』年が過ぎ去って，ここに『うし年』を迎えることになりました。

牛は体は大きく鋭い角も持っていますが，動作はゆるやかで，そのやさしい目は平和そのものです。しかし，絶えず草をはみ，その体は無言のうちに働いて，ゆたかな真珠色の乳を私達にあたえてくれます。牛年の年頭にあたってこの牛のように平和な，牛のように豊かな年が皆様を訪れますよう，私共も種苗・飼料の事業を通じて読者各位のお役に立つよう努力を続けたいと念じておりますので，本年もよろしくお願いし申し上げます。

畜産に関係する私どもは，直接間接，牛とともに日常を過しています。年頭に当たって畜産事典をひらいて牛のことをふりかえってみました。

牛の祖先については，いろいろの説があるようですが，遠く氷河時代が終って，ヨーロッパにも温暖な気候が訪れた新石器時代には『原牛』がかなり広く野生していたと見られ，原始人はこれを狩猟して，その肉を食べ，その皮を衣にしていたと想像されます。南ヨーロッパの紀元前15,000年頃，旧石器時代の洞窟遺跡に野牛の壁画が残っているとのことです。ヨーロッパより早く開けたメソポタミヤやエジプトでは紀元前8,000年頃から牛を飼養していたといわれ，ヨーロッパでも紀元前5,000年には牛を飼い，牛乳を利用していたことが遺跡の中から推察されていて，これらはヨーロッパ原牛とよばれ，現在のホルスタイン種などの祖先と見られます。

アジアでも印度や中国では4,000年前に牛を飼っていたという文献があり，これらの牛はアジア原牛とよばれるタイプのもので，背にこぶのあるセブ牛，インド牛，黄牛などの祖先といわれています。

わが国でも瀬戸内海や東北地方の第4紀洪積層の地中から牛族の骨が発見されていて，縄文文化時代や弥生文化時代の遺跡にはさらに数多くの牛骨が発見されています。これらは短角種で，前述のアジア原牛から発生した黄牛にヨーロッパ原牛の混血したものの子孫が中国や朝鮮を経て入ってきたと想像されますが，太古の時代にどのようにして図体の大きい牛を輸送したのか，長い年月がかかったことでありましょう。

新雪のようにサッパリした気分で，モウかる年にしたい

牧草と園芸　1月号　目次

□緑化植生に使われる雪印のたね　編集係……表2
■アフリカ採集紀行の写真　宝示戸貞雄……表3
□牛年にあたって　中野富雄……1
□寒冷地における飼料作物栽培上の注意点 (1)　兼子達夫……3
■和牛経営の「かんどころ」(1)　西田孝雄……8
■アフリカ飼料草採集紀行 (1)　宝示戸貞雄……13

これが和牛や朝鮮牛の祖先で，最初は食用にも供せられたようですが，わが国では仏教の渡来とともに肉食が禁ぜられ，乳も利用されず，明治以前はもっぱら役用として飼養され，牛車をひき，田畑の耕耘に用いられ，平安の都大路をのどかに進む御所車をひく牛，菅原道実公の使者として天神さまの社殿に飼われた牛，源平の戦で木曽義仲が松明（たいまつ）を2本の角に結びつけて敵陣にとびこませた牛，今も残る伊豆，八丈島，四国宇和島などの牛角力などがわが国の歴史の中の牛のイメージでした。延喜（醍醐天皇の時代，約1,000年前）の時代から農耕に使われ，家族の1員として人間と同居し，信仰の対象でもあって，牛正月，牛祭などが伝えられています。

わが国への乳牛の導入は徳川八代将軍吉宗の頃で，オランダから寄贈され，千葉県房州の嶺岡で飼育されましたが，ついに乳も肉も利用されず，勿論一般への普及も見なかったわけです。

乳や肉を対象とする家畜として，わが国に牛が登場するのは明治以降であります。

明治5年，アメリカから洋種牛ダルハム種（ショートホーン種）およびデボン種各牝3頭と牡1頭が輸入され，東京の官園（試験場）で試験飼養され，その後外国人の渡来とともに神奈川県の民間で乳牛が導入されて搾乳業がはじまり，明治22年には同じくアメリカからホルスタイン種牛5頭が札幌農学校に輸入されて，わが国における牛による乳肉生産の端緒がひらかれました。

明治33年には種牛改良調査委員会が発足して，小農に適するということで，国の奨励品種としてエヤシャー種牛が採用され，ブラウンスイス，シンメンタール，ジャージーなどの品種も導入されましたが，わが国の酪農は搾乳専業を中心として発達したため，乳量の多いホルスタイン種が主体となって，他の品種は影をひそめてしまいました。

牛乳や牛肉が国民の食生活に入りはじめたのは大正時代に入ってからで，酪農も東京周辺や北海道に，ようやくその根をおろしたのであります。

それから約60年，幾多の辛酸を経て，現在の乳用牛数は180万頭，肉用牛は175万頭に達しましたが，牛乳生産を主とするいわゆる酪農は未だに必ずしも安定しているとは言われておりません。肉牛生産については牛肉供給不足でブームに乗っているかに見えますが，生産頭数は伸びなやみ，経営的にも未解決の問題があるやに言われており，同時に乳肉ともに国際化の中で将来に対する不安がささやかれています。

わが国は酪農畜産については後進国のように言われていますが，前述のように牛とのつながりは古く，明治以降は数多くの酪農先覚者や肉牛飼養家の苦心によって，乳・肉牛の能力は著しく改善され，地域に応ずる経営方式も確立して，乳牛1頭の平均年間搾乳量は4,800tとなり，世界の酪農王国オランダの4,170t，デンマークの3,900tを遙かに抜いて世界一となり，牛肉については他国のまねることの出来ない高級牛肉の生産技術をあみだしたのですが，前述の不安は一体どうしたことでしょうか。

わが国の現在の牛乳・乳製品の消費量に対する自給率は89％，肉類は88％で，今後の人口増加，食生活の多様化と必要カロリーの要求増大，海洋資源の生産減などから，蛋白質や脂肪を畜産物とくに牛乳・乳製品および牛肉類から求める声がますます大きくなりましょう。

わが国の国土は狭くとも，恵まれた気候は素晴しい牧草の生産を約束してくれています。『家畜は草の化身なり』という西洋の古い諺のとおり，牧草と飼料作物の栽培利用をさらに拡大してゆくならば，外国に負けぬ高能率な酪農を国内で確立し，1人1人の酪農経営を豊かな安定したものとし，良質な蛋白・脂肪食糧の自給度を高めることが出来ることは疑いありません。

私共は日本酪農畜産拡大発展の陰の力として，より良き種苗と飼料の開発・供給，併せて新しい社会の需要である環境美化，緑化の方向にも応えて，この牛の年を牛歩ではありますが確実に前進いたします。

年頭にあたり日頃のご愛顧に深謝申し上げると共に，今年も当社にご期待のほどお願い申し上げます。